

◆平成23年度新指定文化財◆

鬼子母神道道標・ 更紗染(染織)・指物(木工)



鬼子母神道道標
(正面)

江東区教育委員会は、文化財保護審議会(会長 松平康夫:東京福祉大学教授)の答申を受け、新たに3件を指定、2件を登録しました。また、指定1件、登録2件を解除したため、登録文化財の総数は1055件となりました。



更紗染作品各種



指物作品(荒磯棚)

下町文化

NO. 257
2012.4.27

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

○新指定・登録文化財紹介

○文化財保護審議会委員

吉原健一郎先生計報

○新刊案内

○江東区芭蕉記念館特別展

江戸という時代と文芸

風景漫画家沖山潤の芭蕉と歩く東京

○江東の古道をゆく番外編

川の道小名木川と名所

○困炉裏端(旧大石家日記)⑬

○「江東古写真展」を振り返って

文化財は地域を知る 歴史・文化遺産

年度初めの「下町文化」では、前年度新たに指定・登録された文化財を紹介してきました。今号でも新指定文化財3件、登録文化財2件を2・3面で詳しく紹介しています。

しかし、「文化財って何」という方もまだまだ多いと思います。文化財は、過ぎ去った時代、地域に生きた数えきれない人々が、生活その他諸活動の中

吉原健一郎先生逝く

江東区文化財保護審議会委員の吉原健一郎先生は、去る3月22日に薬石効なく、ご逝去されました。

故吉原先生は、昭和61年以来、長年にわたり本区の文化財保護にご尽

で生みだし、守り伝えてきた文化的な遺産です。

文化財といえ、奈良や京都などにある寺社や仏像などが有名ですが、江東区内にも地域に根ざした文化財が1000件以上あります。その内容は、有形文化財(仏像や石造物など)、無形文化財(民俗芸能、職人の技)などさまざまです。

時代的には、江東区の大部分が江戸時代に埋め立てられたため、それ以前のものはほとんどありませんが、関東大震災や戦災で物を失ってきた歴史を考えると、現代に伝えられた文化財は、地域の歴史や文化を知るうえで欠かすことができません。失ったら、2度と取り戻すことができない貴重なものなのです。

本誌には、文化財、そして地域の歴史など、様々な情報が盛り込まれています。ぜひ、ご一読ください。

力くございました。

体調をくずされても、なお審議会をご心配くださった先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

【関連記事4面】

指定文化財

【有形民俗文化財】 鬼子母神道道標

東砂1-4-6 上妙寺

江戸時代後期の文化10年（1813）に神田小柳町の商人井筒屋久治郎・伊勢屋平吉・佐野屋平七の

3名が世話人となって、江戸から上妙寺へ参詣に来る人々のために建立（再建）した道標です。当初は小名木川沿いの道に、西に向けて立てられていましたが、戦後、現在の場所に移されました。

上妙寺の鬼子母神像は、

第8世日達の時代に天津波で境内に流れ着き、第11世日龍の時代に建立された鬼子母神尊神堂に祀られたといわれています。こうした由緒から「海中出現の鬼子母神」として知られていたことが、天保11年（1840）刊行の『東都本化道場記』に記されています。しかし、道標はそれよりも20年以上前に建てられており、文化年間には上妙寺の鬼子母神像が江戸の人々の信仰を集めていたことがわかります。道標は再建されたものですから、元の道標はさらに古かったことになります。

この道標は、19世紀初め頃から上妙

寺の鬼子母神が信仰を集め、江戸から多くの参詣客があったことを伝えるとともに、小名木川沿いの道に参詣の道としての性格もあり、現在の東砂周辺が江戸の人々の参詣地であったことを示す貴重な文化財です。



鬼子母神道道標(左側面)

【無形文化財（工芸技術）】 木工（指物）

保持者 山田一彦

指物とは、種々の木材を木取りし、組み立て、箱や器、和家具などの精巧な木工品を作る技術です。金属の釘は用いず、端嵌（ハシバミ）、柄（ホゾ）など、外からは見えない継ぎ手の技法によって組み立てます。江戸では、木地を生かした素朴な日用品や茶道具などを作る「江戸指物」として確立しました。

山田一彦さんは、昭和17年生まれで、祖父の代から続く指物師の三代目で

す。都立工芸高等学校を卒業後、建築事務所でデザインの勉強を積み、一級建築士の資格を取得しました。その後は、父・千吉さん（明治44年生、元江東区無形文化財保持者）の指導を受けながら修業を重ねました。昭和59年に千吉さんが亡くなると後を継ぎ、三代嘉丙・茶道指物「千匠」として独立しました。現在は江戸指物協同組合の理事をつとめ、平成12年には国の伝統工芸士、平成17年には東京都優秀技能者に認定されています。

山田さんの技術は、すべての工程で手作業にこだわり、江戸時代以来の「江戸指物」の技術を現在に伝えています。



山田一彦氏

染織（更紗染）

保持者 佐野利夫

佐野勇二

更紗は、インド、ジャワ、タイ、スマトラ、中国、イラン、ヨーロッパなどにおいて制作されている染め物です。日本には、すでに中世には輸入され、江戸時代の後半には、型紙を用い、刷毛で染料を布に摺り込んでいくやり方で、和更紗がつくられました。そのなかで江戸更紗は、江戸好みの独特な渋味に特徴があります。

江東区周辺には、染め物業者が多くいました。日本橋の間屋から比較的近く、地価が安いことから仕事場と干し場のための広い土地が得やすく、また染め上がった布を洗うために必要な河川が近くにあったためです。更紗染業は地場産業として栄えましたが、現在区内では、利夫さんと勇二さんご兄弟の工房のみとなり、更紗染は稀少な伝統技術となっています。

佐野利夫さんは、昭和12年に大島に生まれ、21歳から父佐野一幸さんについて修業を始め、一幸さんや当時工房にいた職人さんたちの技を見ながら技術を学びました。最初は簡単なもの（アルバムの表紙や和装小物、額絵）から始め、1年くらいたって反物の仕事をできるようになりました。一幸さんの没後、三代目更濱を名乗り、弟勇二さん

登録文化財

【有形文化財（彫刻）】

石造神狐像 昭和6年在銘 一對

永代2―37 福住稲荷神社

福住稲荷神社は、深川福住町（現永代2）にあった近江屋喜左衛門屋敷の邸内祠であったもので、明治9年に澁澤栄一が近江屋敷を買収して、明治30年に澁澤倉庫部（のちの澁澤倉庫株式会社）を創業したあとは、同社の守護神として祀られました。

神狐像は、大正12年の関東大震災で焼失した福住稲荷神社が、昭和5年に再興されたことをうけて、澁澤倉庫社員一同によって奉納されたものです。

平成3年に社殿内部から発見された奉納目録には、奉納者として当時の社



佐野勇二氏



佐野利夫氏

とともに仕事を続けています。

佐野勇二さんは、昭和13年に大島に生まれ、28歳から兄利夫さんと同じように、父一幸さんや工房にいた職人さんたちの技を見て技術を学びました。現在、利夫さんとともに仕事を続け、主に洋服用布地を染めています。型染の後、刷毛でボカシや、筆入れを加えるなど工夫を加えています。



石造神狐像

員87名の名前が連なっており、深川の近代倉庫業に関わった人々の信仰を伝える貴重な文化財です。

【有形民俗文化財】

力石 10個

永代2―37 福住稲荷神社

澁澤倉庫の守護神である福住稲荷神社に納められている力石です。10個のうち6個には「佐賀町」の文字が、1個には澁澤倉庫の社章が刻まれています。佐賀町や澁澤倉庫で働く人たちが持ち上げた力石と考えられます。人名が刻まれている力石もあります。いずれも火をかぶっているため、戦災にあったとみられます。なお、年代が刻まれているものは3個で、それぞれ昭



力石

和5年（1930）・同8年・同15年です。

深川の力持と深川の近代倉庫業との関連性が見える点でも興味深い文化財です。



澁澤倉庫の社章が刻まれた力石

【無形文化財（工芸技術）】

指定解除

ガラス工（江戸切子）

保持者 小林英夫

登録解除

木工（桐箆笥） 保持者 金久保健二

【史跡】

所在地変更

芭蕉翁古池の跡

常盤1―3・16・17付近

慈眼寺跡 常盤2―5・6付近及び

猿江2―15付近

十万坪鑄銭場跡 千田3―1付近

牡丹園跡 毛利1―19・20

吉原健一郎先生略歴



昭和13年 東京に生まれる。

昭和42年 東京教育大学大学院文学研究科修士課程修了

昭和42年 東京都総務局都政史料館

(のち都公文書館)勤務

昭和58年 成城大学文芸学部助教授

(のち教授)

昭和61年 江東区文化財保護審議会委員 (平成24年まで)

平成6年 江東区史編纂委員

平成8年 江東区文化財保護審議会会長 (平成10年まで)

平成12年 江東区区民憲章策定区民会議委員長

平成13年 江東区区政功労者表彰

平成21年 成城大学退職・名誉教授

《主な著書・監修》

『江戸の情報屋』『江戸の町役人』

『目で見る江東区の100年』ほか

吉原先生のご逝去を悼む

江東区長 山崎孝明

このたび、本区文化財保護審議会委員をながきにわたって務められた吉原先生のご逝去の報に接し、心より哀悼の意を表します。

先生には、文化財保護審議会委員と

して長年にわたりご尽力いただき、また、だれもが住みよい明るいまちを築くための区民憲章の策定にあたっては、区民会議委員長の重責を担っていただき、感謝の念に堪えません。

ご専門の歴史学では、江戸の歴史、文化史に特に造詣が深く、斯界の重鎮であられました。文化財保護審議会では、文化財を通して江戸下町の町人文化について論じられ、文化財保護への取り組みの大切さを教えてくださいました。

その熱意を受け継ぎ、今後更なる文化行政の発展に繋げていく所存です。心からご冥福をお祈りいたします。

吉原先生を悼む

江東区教育長 岩佐哲男

吉原先生の急逝の報を知り、心より哀悼の意を表するものであります。

吉原先生は、江戸や深川の文化史に精通され、文化財保護の大切さや本区の歴史の解明などに、精力的に取り組まれ、多くの足跡を残されました。

審議会では、会長、副会長の重責を担われ、歴史・文化財刊行物へのご助言をいただく出版委員会の委員長も引き受けいただきました。

また、本区の歴史を総合的にまとめた『江東区史』の編纂委員としても統括的

なお立場でご活躍されました。私たちが、先生の文化財保護に向かう姿勢とそのご見識から学ぶべきことは多く、今後ともそのご遺志を受け継ぎ、文化財行政に力を尽くすことが責務と考えております。

先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

吉原健一郎先生のご逝去を悼む

江東区文化財保護審議会

会長 松平康夫

吉原健一郎先生は、昭和61年に文化財保護審議会委員に就任されて以来、長年にわたって江東区の歴史・文化財保護に重責を担われてきました。また、『東京市史稿』の編さんでつちかわれた厳密な史料考証と、江戸の庶民文化にたいする独自の視点をもとに多くの著書や論文を世に出されております。

先生は私にとって40数年来のかけがえの無い職場の先輩であり、江戸、東京の歴史について多くの御教示を受けました。また、お酒を飲み歓談したこともなつかしく思い出されます。急逝の知らせにただただ呆然たる思いです。

審議では、ときにきびしい指摘をされましたが、若い後輩にたいするやさしさがその根底にはありました。江東区の歴史と文化にたいする先生の熱意と愛情を後輩として受け継ぎ、文化財

保護に努めてまいりたいと存じます。心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

新刊案内

『江東区文化財1 深川北部』

区文化財7冊目は「深川北部」で、小名

木川北部の新大橋・常盤・森下・高橋、南部の清澄、大横川を越えて北部の毛利・住吉・猿江、南部の扇橋・石島・千田・海辺・千石の文化財を収録しました。

『東都三十三間堂旧記 四』

区指定文化財『東都三十三間堂旧記』（深川2 正覚寺所蔵）のうち、第4巻を刊行しました。本史料は、堂守の鹿塩家当主が書きつづったもので、天明元年（1781）から寛政9年（1797）に関する内容です。

※頒布場所

文化観光課文化財係（区役所4階）

ことう情報ステーション（区役所2階）

芭蕉記念館（常盤1-6-3）

深川江戸資料館（白河1-3-28）

中川船番所資料館（大島9-1-15）

4

江東区芭蕉記念館特別展

江戸という時代と文芸

— 香忠・春日局・光圀などから近藤勇まで —

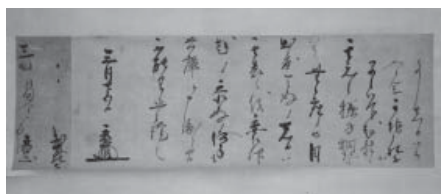
風景漫画家沖山潤の芭蕉と歩く東京

4月26日(木)～6月24日(日)まで

芭蕉記念館では、二つのテーマからなる特別展を開催しています。

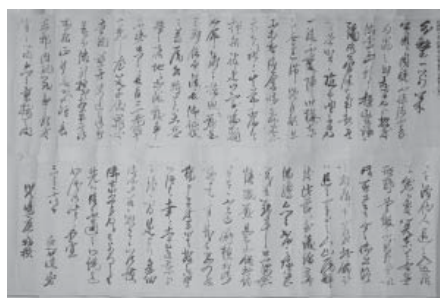
テーマの一つめは、「江戸という時代と文芸」です。徳川家康の開幕から15代將軍慶喜にいたる、およそ260年間を江戸時代といえます。この時代は、それまでの戦乱の世に終止符が打たれ、幕藩体制という封建制度のもと、庶民の文化が大きく花開いていった時期でもありました。

展示では、歴史の表舞台に立った武人・文人38名の41点を取り上げ、江戸時代の大枠を通観しています。



徳川秀忠書状

主な資料としては、幕府の確立期に徳川家康のもとで武家諸法度などを起草した以心崇伝、二代將軍の秀忠、そのブレンでもあった本多正純や天海、三代將軍家光の乳母の春



近藤勇書状

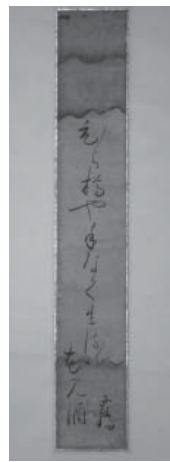
日局、紫衣事件に連座した沢庵、水戸黄門の名で知られた徳川光圀、六代將軍家宣に仕

え正徳の治を行った新井白石などから、後期に寛政の改革を先導した松平定信、天保の改革の水野忠邦、桜田門外の変で刺殺された大老井伊直弼などの幕閣、佐久間象山・吉田松陰などの思想家、さらには新撰組局長の近藤勇にいたる歴史に名を馳せた人物の手紙や短冊などの遺墨が並び、多くが初公開となる資料で構成しています。

一方、文人では元禄文学を支えた浮世草子作家の井原西鶴や俳人の松尾芭蕉から、化政文化の戯作者山東京伝・曲亭馬琴、戯作者・国学者の上田秋成、

俳人小林一茶まで多彩な文人を取り上げています。

歴史の教科書で一度は目にした人物に、この機会に出会って見ては如何でしょう。



井原西鶴筆「ひら樽や」句短冊

テーマの二つめは、「風景漫画沖山潤の芭蕉と歩く東京」です。沖山潤氏は、昭和41年2月、東京都目黒区に生まれ、ゲームのグラフィックデザイナーとして活躍後、「月光通りのマスター」で『週間ビジネスジャンプ』（集英社）の新人賞を受賞されています。平成14年（二〇〇二）頃から下町を題材した独特の風景漫画に取り組むようになり、繊細な描写の中にほのぼとした漫画の持つユーモラスを加味した「風景漫画」という新しいジャンルを開拓しました。

作品は、都内にある芭蕉句碑をもとに取材し、江東区常盤の芭蕉稲荷神社



沖山潤作「隅田川・新大橋」

の「古池や蛙とび込む水の音」を皮切りに、日本橋室町の「発句也松尾桃青宿の春」、隅田川・駒形橋より浅草を臨む「花の雲鐘は上野か浅草か」など作者のコメント入りの15作品が並んでいます。このほか千句足らずの芭蕉の句の中から作者が「ぬれて行や人もおかしき雨の萩」や「さまざまの事おもひ出す桜かな」など15句を選び、芭蕉句の「ユーモア」の世界を漫画で描いた「漫画で描く沖山潤の芭蕉句傑作選」も併せて展示した沖山ワールドです。

この二つのテーマから成る歴史の重厚さと漫画による芭蕉句の「ユーモア」の世界を十分にご堪能ください。

(横浜文孝)

芭蕉記念館

開館時間

午前9時30分～午後5時
(4時30分までにお入りください)

展示室休室

第2・4月曜日(祝日の場合は翌日)

入館料

大人100円 小中学生50円

交通

都営地下鉄新宿線大江戸線
森下駅 徒歩7分

問合せ

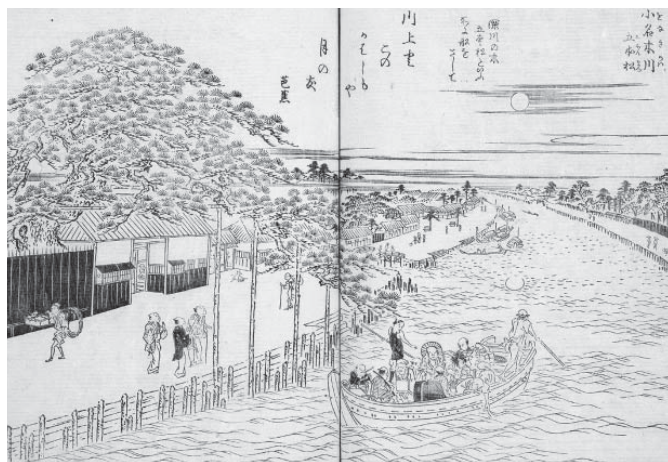
江東区芭蕉記念館
江東区常盤1-6-3
☎03(3631)1448

江東の古道をゆく 番外編 川の道

小名木川と名所

江東区を東西に流れる小名木川。天正18年（1590）、徳川家康が行徳の塩を運ぶために開削を命じたといわれています。

左の『江戸名所図会』挿絵は、猿江にあった五本松です。小名木川がややカーブして描かれていますが、実際はまっすぐに通っています。絵には、たくさんのお客が乗っている川舟が見えます。小名木川は物だけではなく、江戸から房総へ、あるいは江戸へと向かう人たちの往来もさかんでした。



今回は、川の道小名木川を取り上げ、名所絵に描かれた小名木川の名所について考えてみます。

名木五本松

五本松は、「本所深川絵図」（下図矢印）に記され、また「名所江戸百景」にも取り上げられるなど、「誰知らぬ者なき」という名木でした。本来は五株あったものが、後に一株となったものの、「五本松」という名は残ったということです。明治42年（1909）2月、枯れたために伐られました。その時は、大勢の人が見守ったそうです。小名木川を往来する人たちもその見事な枝振りを愛でたことでしょう。「奥の細道」の旅を終えた芭蕉もそうでした。『江戸名所図会』には、「川上とこのかはしもや月の友」（元禄6年・1693吟）の芭蕉の句が記されています。芭蕉は、五本松のほとりに舟をうかべて、同じ月をながめているであろう川上にいる友人に想いをはせたのです。



町場と農村との境

ところで、芭蕉の句の前書きに「深川の末五本松といふ所に船をさして」とあります。猿江のあたりは深川で、横十間川から東は本所です。ところが文政期（19世紀なかば）に幕府が猿江の寺院に由緒の書上を提出させると、「南本所」重願寺、「本所猿江村」妙寿寺、「本所猿江」廣濟寺、「深川猿江」泉養寺、「本所猿江」慈眼寺、「本所猿江」覚王寺と出してきたのです。幕府の担当者は、本所猿江と書いてきた寺院は、地所はすべて深川なので、深川寺社のグループに入れるとのコメントを付けています。つまり猿江のあたりは、深川と本所、どちらであるのかがあいまいとなっていたのです。



古代以来、山川をもって境界とされたことから、人間は地理的条件により境界を意識することがあります。猿江あたりの場合、西は大横川に、東は横十間川で区切られていることから、深川と本所いずれにも属する両属の地、すなわち境界の地であるとの意識があったと思われます。また「本所深川絵図」から見て取れるように、西は町場、東は農村であり、景観からいっても猿江あたりは境界でした。

こう考えていくと、なぜ五本松が小名木川の名所として取り上げられたのか、気がなります。その枝振りが奇観であったとともに、境界の地にあったからではないでしょうか。例えば、新幹線に乗って東京に帰る時など、車窓に建物が増え、夜にはネオンが見えてくると、ああ帰ってきたんだと思われ方もいると思います。『江戸名所図会』挿絵のように、江戸に戻ってきた船旅の人たちも、五本松を見て、ああ江戸市中に戻ってきたのか、と感じたことでしょう。逆に、江戸から房総へ旅する人

は、これから田園地帯なんだと思う目印にもなったと思います。芭蕉が、ここで舟をとめて、友だちを想ったことは、「深川の末」五本松に對するこゝういった意識があったためだとも考えられるのです。

五百羅漢寺への道しるべ

現在、四ツ目通りと小名木川が交差する地点に架かる小名木川橋の北詰東側に「五百羅漢道標」が建っています（『本所深川絵図』①）。正面には「是より五百らかん^江右川（通り）八町」と先へ参り（申候）、右側面には「此横道四ツ目橋通り亀戸天神（道）」と刻まれています。道標は、現在の西大島駅付近にあった五百羅漢寺への道を往來の人々に指し示したものです。

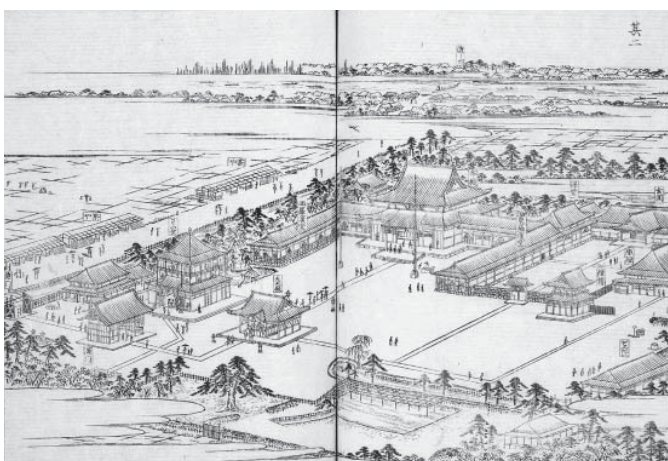
道標によると小名木川北通りを8町ほど行くと五百羅漢寺へ行き着くとあります。現在は、川沿いまで建物が建っていますので、絵図上で進みますと、横十間川に行き当たります。ここには大島橋が架かっていました。現在、大島橋は震災復興後に北側へ移り、その西詰には釜屋堀子育地藏堂がありま



す。ここにも五百羅漢を案内する「五百らかん道標」

があります。かつては小名木川沿いの大島橋たもとに建ち（『本所深川絵図』②）、道行く人を案内していました。

道標は、小名木川を舟で行く人たちにも見えたと思われます。『江戸名所図会』に見られるように、かつて小名木川の護岸は低く、舟から容易に上陸することができました。道標の存在は、参詣する人々の往來がひんばんであったことを物語っています。そして、田

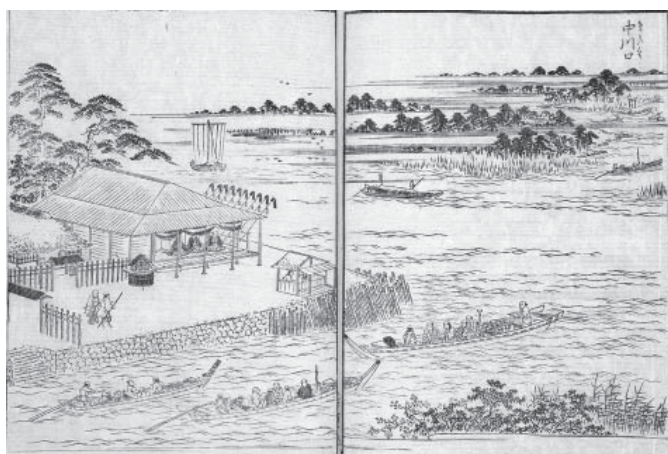


園地帯の名所五百羅漢寺（上図）を案内する道標が猿江に建てられたことは、この地が境界であることを強く感じさせるものです。

もうひとつの境 中川番所

五本松のほかに、小名木川の名所として取り上げられたものが、中川番所です（下図）。中川番所は、寛文元年（1661）6月に萬年橋北岸にあった深川番所が中川口に移転したもので、江戸へ出入りする川舟を取り締まり、のちには商品荷物の改めも行うようになりました。ここは、中川と小名木川、そして行徳へと流れる船堀川が交差する川の十字路で、交通の要衝でした。

下の『江戸名所図会』挿絵の主題は「中川口」で、左の「名所江戸百景」も同様ですが、いずれも番所が描き込まれていること、とくに前者では番所の建物が大きく描かれていることに注意したいと思います。そして、絵の構図が「五本松」の構図と似ていることから、実は番所を主題として取り上げ



たのではないかと考えられます。幕府の施設をこれだけはっきりと描いたものはめずらしいのではないかと思います。

文政元年（1818）、御府内の範圍が確認された際、東側の境は中川とされています。中川番所は、御府内の出入り口、境界の位置にあったということになります。小名木川を往來する人々が番所を見たとき、ようやく江戸に近づいたと感じ、あるいはこれから江戸を出ることを思い、かすかな緊張感とともに番所の前で舟をとめたのではないのでしょうか。中川番所は江戸を意識させる名所であったと思われます。

（文化財専門員 栗原修）

江東古写真展を振り返って



古写真は、失われた風景や記憶をよみがえらせるとともに、新たな発見をもたらしてくれるものです。今回、2012年1月18日から29日まで「江東古写真展・昭和の想い出、平成の風景」を深川東京モダン館で開催しました。文化財係では、平成19年に文化財保護推進協力員の有志を中心とした「古写真整理プロジェクト」を立ち上げ、区内を撮影した古写真の整理作業を進めてきました。今回の古写真展はその成果のひとつです。

期間中は延べ千人を超えるたいへん多くの方々に会場いただき、会場は連日大賑わいでした。隣り合った見知らぬ方同士で写真を見ながら昔話に花が咲く、といった光景もしばしば見られました。ご記入いただいたアンケートからは、古写真が持つ力というものがひしひしと感じられました。

今回の企画成功のポイントは、プロジェクトメンバーの存在にあります。メンバーは古写真の選定から説明文の執筆、現在地の写真撮影、地図の作成、会場設営にいたるまで担当され、期間中も毎日交代で会場に詰めて、解説役を買っ

て出してくれました。そのおかげで、充実した内容の展示を行うことができました。まさに「区民協働」の成功例と言えるでしょう。

また、区民のみなさまに古写真のご提供を呼びかけたところ、たいへん多くの貴重な古写真が集まりました。スペースの都合上、すべてを展示することはできませんでしたが、ご協力いただきましたみなさまに深く感謝申し上げます。

今回の展示をふまえて、古写真集の刊行も予定しております。もし、ご自宅にまだ眠っている古写真がございましたら、文化財係までご一報いただければ幸いです。(元文化財専門員 中西崇・青木祐二)



囲炉裏ばた旧大石家日記 ⑬ メトロガイドの 取材を受けました

旧大石家住宅は、江東区内に残る最古の民家です。現在は、仙台堀川公園内で保存され、土・日・祝日は一般に公開されています。また平日は、旧大石家住宅友の会の方々が交代で掃除や囲炉裏の火入れをして、建物の保全にご協力いただいています。

こうしたボランティアの方の協力で守られている旧大石家住宅は、時に区外の方々からも注目されることがあります。先日、地下鉄の無料情報誌『メトロガイド』連載中の街歩きイラストルポ「東京探訪」で記事に取り上げた



囲炉裏を囲んでの取材風景

いと申し出があり、イラストレーターの高橋カオリ氏が取材に訪れました。雑誌4月号には、高橋氏のかわいいイラストと一緒に旧大石家住宅が紹介されました。

当日は、旧大石家住宅の見学とイラスト素材の収集のほか、友の会の方ともお話をされ、昔の生活の様子や旧大石家住宅の魅力について尋ねられました。ボランティアさんは、「昔はほとんどの家に囲炉裏があつて、煮炊きしていたよ。ボランティアになったのも、たまたま見学に来た大石家住宅に囲炉裏があつて、これが好きだから」と楽しそうに語られていました。

また、高橋氏は、見学者は年配の方や小学生が多いと聞くと、もっと若い人にも見てもらって、昔の暮らしを知ってもらえるとよいと話していました。

緑に囲まれた公園の中にたたずむ昔ながらの建物は風情があり、訪れる人を少し懐かしい気持ちにしてくれます。区民ボランティアの方に守られている旧大石家住宅にぜひ足を運んでみてください。

(所在地)

江東区南砂5-24地先 仙台堀川公園内

(問合せ)

江東区地域振興部文化観光課
文化財係 (3647) 9819